

第7回

俺はこんなに偉い，お前も見習え！ ——自力本願の出願理由書

あお くに まさ やす
青谷正妥

京都大学留学生センター

学生のころ，1人を除く仲よしグループの女子全員を同じ文句の電話で次つぎと誘い，総スカンを食った頭の悪い男がいました。しかし，2チャンネルの「毒男板」には，ある女が男友だち全員の携帯に同じ誘いのmailを入れたが自分にだけは来なかったというような話が面白押しだったか。電話は携帯に進化しても，人類は簡単には進化しないようですね。

1人を除く云々はともかく，大学院出願もこれでは成功しません。希望大学に合わせた個別のメッセージを送らなくては行けないのです。推薦状は他人まかせですが，出願理由書(statement of purpose)はある種の自画像であり，日本にはないシステムですから，とまどう学生さんも多いようです。しかし本人の自筆はこれしかありません。じっくりと目を通されると覚悟しておきましょう。



Statement of purpose の目的

1) 意欲・能力や研究・将来計画とプログラムとの整合性の確認

出願者がやりたい研究をできるかどうかの判断です。読者の方がたは，十分な情報収集をされるでしょうから，まさかその大学にはない研究を希望するというような初歩的なミスはないと思いますが，その分野の研究があるからといって，必ずその先生に付けるとは限りません。各研究室のcapacityの問題があるからです。研究費も潤沢で兵隊も必要な実験系ではかなり融通が利くようですが，理論系はもともと定員が少ないうえに，食いはぐれないように慎重に才能と将来性を診断するので，狭き門である場合もあ

ります。ですから，ここでいう「整合性」には，「意欲・能力があるか」と「定員のOKか」の二つの意味があることになります。

2) 出願者の興味を測る

まず，出願者の全体的な熱意です。文の内容や論旨の一貫性，詳細にわたってしっかりと推敲され十分に練られた文であるかなど，時間をかけて丹念に仕上げられたものかどうか判断します。さらに，他校と比較した場合の当該プログラムへの興味は測られます。基本的には併願者ばかりですから，はっきりとその大学が第一志望だという意思表示ができれば，大学も好都合で志願者にも有利です。

名前だけを変えて全員に送る同文の手紙をform letterといいますが，大学院出願にform statementは禁物！たしかに「有機合成が好き」程度を書いておけば，名前を変えるだけでほとんどの大学に使えるでしょうが，当然インパクトはありませんね。

3) 人物評価：「文は人なり」

読み手も化学者(＝元化学専攻の学生)ですので「蛇の道は蛇」。自身の経験にも照らして，statement of purposeだけでもかなりの程度まで志願者の「人」が見えるはずで，「他人に何がわかる」という態度は禁物です。自分の経験にも照らして，ある程度まではその志願者の「人」が見えると思います。ぞんざいな文とそれなりの時間と労力を費して全力投球で書いた文は「力」が違いますから，真摯な姿勢が明らかな，強い文を書いてください。

もちろん、そのための秘策(?)は、実際に真摯な姿勢をもって臨むことです。

4) ほかの書類からはわからない事情・情報を得る

大学によっては、「特殊事情があれば書いてください」とわざわざ別項目を設けているところがあります。そうでない場合でも、日本の大学の特殊事情や選考に役立つような個人的な事情は絶対を書くべきです。たとえばGPAが低い場合には、日本におけるGPAの意義(のなさ)に言及すべきですし、本当に病気や仕事で極端に成績が悪い年があったら、それも説明すべきです。ただし、説得力がなければ理由(reason)ではなくいいわけ(excuse)になるだけです。具体的に書くことが肝要です。病名・症状や病院通いの様子、親が倒産したので弟妹のために2年間働いていたなど具体性のある説明。また、最初の2年間は遊び回っていたが3年生から勉強の鬼になり、それが成績に如実に現れているといった真っ正直なコメントにこそ真の説得力があるのです。もちろん、急に成績が上がるなど、データの裏づけがなければ、茶番かメロドラマにすぎませんね。Hollywood effectだけが目的なら、書かないほうがましです。

Positive に Aggressive に

日本人は今でも「謙譲の美德」の国民ですが、事実を述べるという意味で自分の能力や特長をそのとおりに書くことをためらってはけません。東京アメリカンセンター元館長のBrooks Spectorさんは、言葉の綾でしょうが、「こんな失礼な、と感じるそのレベルよりもう一步踏み込んで」とアドバイスされていました。クラスで1番とか、先生に感心される研究をしたとか、本当なら当然書くべきです。真実をそのとおりに書くことをためらわないように。

昔の日本人はinterviewで“I am stupid and useless(愚かな役立たず者で)”とあって、“Inscrutable... (不気味だ...)”そして“Why are you so deep?(お主、できるな)”と恐れられたりしたそうですが、やっぱり「若輩者」の皆さんにそういう裏技は無理ですね。ねっ!

先生の推薦状との整合性

あまりにも当然ですが、既述のごとく推薦状との



Native Check をかける

いかに真摯・丹念でも日本人の英語はデタラメですから、よほどの達人でもnative checkなしにstatement of purposeを提出するのは愚行です。当然化学の知識のある人に見てもらわなければならないものや文法的誤りを直すにとどめてくれ」と釘を刺す必要があります。全体がネイティブの文になってしまふと拙いからです。TOEFLの点がそこそこなのに、美文のstatement of purposeをだしても、失笑を買うだけと心得てください。「意味・内容が伝わる」ように改造するだけでも、十分に“劇的ピフオーアフター”になるはずで、添削の必要性を痛感されるでしょう。当然、日本人指導教官の「英語を直してやる」は断ります(または、やってもらって深謝してからnativeにも見せます。状況判断でどうぞ)。

英語の苦手なアメリカ人(帰化など)が普通にいるアメリカでは、文法的に正しく、意味がよく伝わり、内容があれば許してくれるのが普通ですが、ここに来て外国人の英語力が確実に向上しているのも事実ですので、心して取り組んでください。

compatibilityは非常に大切です。推薦者には、口頭でstatement of purposeの内容を説明したうえで、簡条書きのsummaryをお渡しするのを忘れずに。日本ならではの現象ですが、書いたものを見せてくださる先生なら、自分でしっかりと整合性のチェックをしてください。

絞りすぎない程度に絞る

染め物の極意ではありません。やりたいことを具体的に書きすぎる失敗の話です。具体性は大切ですが、選択肢を狭めすぎると、よくできても、そこには空きがないという理由だけで撥ねられる恐れがあります。本当にそれ以外には希望がないのならともかく、第2希望なども含めてやや幅をもたせることをお勧めします。日本でも第1志望の研究室に進めないことがあります。「人生バラエティーに富め!」ですので、文字どおりcast a wide netで行きましょう。

「お行きなさい」